

和文露訳の問題点(3) —連体修飾表現の翻訳法についての試論(その2)—*

高橋 健一郎

はじめに：「外の関係」とは

前稿「和文露訳の問題点(2)―連体修飾表現の翻訳法についての試論(その1)―」(『文化と言語』第71号)では、日本語の連体修飾表現のうち、「基本型修飾表現」の「内の関係」に焦点を当て、その露訳について考察した。本稿では、「内の関係」にも適宜言及しつつ、「外の関係」を中心的に扱う¹。

前稿でも触れたように、日本語学においては「外の関係」について様々な立場があり、その分類に関しても意見が一致していないが、本稿では「内容補充修飾」と「相対名詞修飾」、「付随名詞修飾」の3つに分類する²。

1. 内容補充修飾

内容補充修飾とは、例えば「田中さんが結婚する(という)噂」(一本の下線は連体節、二重下線は主名詞を表す、以下同様)のように、連体節が主名詞の内容を説明しながら修飾するものである。このタイプは日本語学においても分類は様々であるが、本稿では、連体節と主名詞を「という」や「との」で結ぶ

* 本研究は平成21年度札幌大学研究助成制度による研究の成果の一部である。

¹ 「内の関係」、「外の関係」については前稿(高橋 2009)を参照のこと。

² 寺村(1975-78)は「外の関係」を「ふつうの内容補充」と「相対的補充」の2つに分けており、前稿(高橋 2010)でもそのように記したが、ここでは「相対的補充」を「相対名詞修飾」と「付随名詞修飾」に分けて考える。この分類自体に関しては、日本語記述文法研究会編(2008)が本稿の立場に近い。

「トイウ修飾表現」、「トノ修飾表現」が可能であるものに限定する³。

また、日本語の内容補充修飾の主名詞には主に①「言語表現・思考・認識・心情を表す名詞」(質問、説明、発言、伝言、話、噂、知らせ、批判、意見、提案、予想、想像、印象、感想、思い、疑問、懸念、心配、危惧、願望、期待、予感、意志、決心、信念、気分、意識、記憶、喜び、嬉しさ、悲しみ、怒り、あせり、不安…)と②「事柄を表す名詞」(事実、出来事、事件、騒ぎ、状態、事情、原因、理由、目的、計画…)がある。

ロシア語の内容補充修飾は、表現形式としては、主に что節やчтобы節などにより接続される場合、疑問文がつく場合、動詞不定形が主名詞に直接つく場合がある。日本語で内容補充修飾節をとれる主名詞であっても、ロシア語ではそう表現できない場合もあり、その対応は必ずしも単純ではない。具体例を挙げよう。

1.1 接続詞чтоによる修飾表現

ロシア語では基本的に、内容を表す接続詞 чтоによって従属節を接続するパターンが多く見られる。

- (1) 彼が死んでしまうという思い : **мысль, что он умрет**
- (2) 彼女が結婚したという噂 : **слухи, что она вышла замуж**
- (3) 私たちが嫌われているという印象 : **впечатление, что нас ненавидят**
- (4) 彼が正しいという結論 : **заклучение, что он прав**
- (5) 彼が犯人であるという説明 : **объяснение, что он виновен**
- (6) ファイルが見つからなかったというメッセージ : **сообщение, что не удалось найти файл**
- (7) 彼女が死んだという知らせ : **известие, что она умерла**
- (8) 我々が辛抱強くなるべきという意見 : **мнение, что мы должны**

³ 「内の関係」でも「トイウ修飾表現」が見られる場合はある(日本語記述文法研究会編2008 : 65-67)。なお、「トイウ修飾表現」、「トノ修飾表現」については前稿を参照のこと。また、日本語では「トイウ」や「トノ」が必須の場合とそうでない場合があるが、その問題についてはここでは扱わない。

быть терпеливыми

- (9) すべてうまくいくという信念 : **вера, что** всё будет хорошо
- (10) 息子に会えるという期待 : **нежда, что** увидит сына
- (11) これはただの偶然にすぎないという疑い : **сомнение, что** это всего лишь дело случая
- (12) このプログラムは前のバージョン用であるという警告 : **предупреждение, что** программа предназначена для предыдущей версии
- (13) この見学は行くに値しないという予感 : **предчувствие, что** не стоит ехать на эту экскурсию
- (14) 愛されているという自信 : **уверенность, что** тебя любят
- (15) 彼が無事に帰ってきたという喜び : **радость, что** он вернулся здоровым⁴
- (16) 彼が競争に勝ったという事実 : **факт, что** он выиграл соревнование
- (17) お金が無いという理由 : **по причине, что** нет денег⁵
- (18) 何かが起こるといいう危惧 : **опасение, что** что-то случится⁶

1.2 接続詞 чтобы による修飾表現

主名詞によっては、что 節ではなく、чтобы 節をとるものがある。主に要求、目的、願望などを表すものである。

- (19) 私がここに残るようにという要求 : **требование, чтобы** я остался здесь
- (20) 私たちの音楽をみんなに知ってもらおうという目的 : **цель, чтобы**
о нашей музыке знали все

⁴ 「喜び」のような感情を表す主名詞をもつ表現は「付随名詞修飾」とも解釈可能である。

⁵ 「お金が無いという理由」と「お金が無い理由」の違いに注意が必要である。前者は「お金が無い」が理由そのものであるのに対し、後者は「お金が無いことの」理由である。後者のタイプは本稿では「付随名詞修飾」に分類する。なお、後者はロシア語では例えばпричина, почему нет денегなどと表現される。

⁶ 「危惧」を表す名詞（опасение, боязньなど）はほかにもчтобы неや как бы неという接続表現をとる場合もある。

- (21) 夢がかなってほしいという願い : **желание, чтобы** мечта сбылась
 (22) 私がそれに参加するという必要性 : **необходимость, чтобы** я участвовал в этом

1.3 動詞の不定形

これまで、что ないしчтобыという接続詞によって導かれる節の例を列挙してきたが、ロシア語の特徴として、動詞の不定形を主名詞に直接つけるという例も挙げられる⁷。この場合ロシア語では「節」を構成しないが、しかし日本語との対応ではむしろこれが最良であることも少なくない。例を挙げよう。

- (23) 息子に会えるという期待 : **надежда увидеть** сына
 (24) 他の都市に引っ越すという決心 : **решение переехать** в другой город
 (25) 彼らを助けるという同意 : **согласие помочь** им
 (26) 彼らに危害を加えるという意図 : **намерение вредить** им
 (27) この誤りを直すという試み : **попытка исправить** эту ошибку
 (28) ぐうたらな生活をやめるという約束 : **обещание бросить** праздную жизнь
 (29) 音楽をやりたいという願い : **желание заниматься** музыкой
 (30) この問題の解決を急がねばならないという必要性 : **необходимость спешить** с решением этого вопроса

動詞不定形で表される動作の動作主を示すには、名詞にвашなどの所有代名詞や名詞の生格をつけてその動作主を示す場合 (**ваше** согласие помочь им : あなたの彼らを助けるという同意)、あるいは動詞不定形とともに与格で動作主を示す場合 (**необходимость** ему спешить : 彼が急ぐ必要性) などがある。

⁷ なお、多くの場合、動詞不定形と同様に動詞派生名詞が用いられる得るが、これらの名詞は動詞不定形と比べても動詞性がさらに失われ、日本語の「節」からさらに離れるために、ここでは扱わないことにする。

1.4 疑問文を伴う

さらに、日本語と同じように、疑問文を直接つなげることにより、主名詞を説明する場合もある。

- ㉑) どの言語を学ぶかという疑問 : **вопрос, какой язык изучать**
- ㉒) 彼が時間通りに来るかという質問 : **вопрос, придёт ли он вовремя**
- ㉓) なぜ人間の足は長いかという説明 : **объяснение, почему у людей длинные ноги**⁸
- ㉔) どこに向かっているのかという不安 : **беспокойство, куда мы идём**

1.5 日露間の不对応

ここまでは日本語とロシア語の対応が分かりやすい例がほとんどだったが、しかし実際には対応しない例も多い。まず、ロシア語では主名詞の内容をчто節で直接説明できない場合がある。例えば、日本語では「祖父が亡くなったという手紙を受け取った」という表現は可能だが、ロシア語では **письмо** (手紙) という名詞に что節を直接つなげ、その内容を示すことはできず、関係代名詞節などにより「と言われている／と書かれている」というような表現を補わなければならない。そのような例をいくつか挙げよう：

- ㉕) 祖父が亡くなったという手紙を受け取った : **Я получил письмо, в котором написано, что дедушка умер.**
- ㉖) 彼の報告には決定が採択されたという箇所がある : **В его докладе есть одно место, в котором говорится, что решение принято.**
- ㉗) この事故で2人が亡くなったという記事に出くわした : **Мне попалась статья, в которой говорится, что в этой аварии погибло два человека.**

⁸ これは「なぜ人間の足は長いかということに対する説明」というように解釈され、「付随名詞修飾」と分類することもできる。ロシア語でも、**объяснение тому**, почему у людей длинные ногиとも表現される。

このように「書かれている」などの述語が欠落していると考えられる連帯修飾表現を益岡(2002: 97)などでは「短絡的表現」と呼んでいるが、(35)、(36)、(37)の日本語の例も、ロシア語を通して見た場合、「短絡的表現」と捉えることも可能である。

さらに、日本語とロシア語で対応しない一連の例がある。

(38) 犯罪者を土に埋めるという刑 : **наказание, по которому** зарывают преступника в землю

(39) 日本に発展途上国から研究者が招待されるという計画 : **проект, по которому** в Японию приглашаются исследователи из развивающихся стран

この2つの例は、日本語では「トイウ修飾」が可能であり、「内容補充修飾」と解釈することに何の問題もなさそうだが、ロシア語では内容を表すчто節を直接主名詞につなげる表現方法は難しく、関係代名詞которыйを伴う「内の関係」によって表されるのが普通である。逆にこのロシア語を通して見た場合、日本語でも「内の関係」と捉えることも可能であることに気づく。(38)、(39)の日本語はそれぞれ

(40) 刑により（に基づいて）犯罪者を土に埋める

(41) 計画により（に基づいて）日本に発展途上国から研究者が招待される

などの格関係を想定することが可能である。なお、ここで「格関係」と呼んでいるのは、従来の多くの先行研究のように「格助詞」によって示されるものだけでなく、複合助詞やその他を含めた表現により示されるものであり、日露対照言語学における「深層格」のレベルに基づくものである⁹。

⁹ 詳しくは前稿（高橋 2009）を参照のこと。

もうひとつ例を挙げよう。

④2 紅衛兵が線路の上を歩いている写真

という例は、寺村(1977b: 25)では内容補充修飾であるとされ、それに対して益岡(2002: 97)ではそれが否定され、「が写っている」が省略された「短絡的表現」とであるとされる。ロシア語では фотография (写真) に что 節を直接主名詞につなげてその内容を表すことはできず、「が写っている」を補った④3のような表現か、

④3 фотография, **на которой запечатлено**, как идут хунвэйбины по рельсам

あるいは「が写っている」を補わずに、④4のようなただの普通の「内の関係」の表現

④4 фотография, **на которой** идут хунвэйбины по рельсам

で表されるのが普通である。この例をもとに考えると、逆に日本語例文もまた、主名詞と連体節の間に「写真(の中)で紅衛兵が線路の上を歩いている」のような格関係を想定することも十分可能、つまり「短絡的表現」とも、普通の「内の関係」とも捉えられる¹⁰。

これらは、従来多くの研究では、「内の関係」について「格助詞」によって叙述文を作れることを判断基準としていたために、「内の関係」とみなされなかったが、しかし前稿で主張したとおり、「内の関係」で想定される「格関

¹⁰ 本稿では、寺村(1975-78)とは異なり、形式的に「内容補充修飾」を「トイウ修飾」や「トノ修飾」が可能である修飾に限定しているため、この例文に関しては「内容補充修飾」とは捉えない。なお、「内容補充修飾」と「内の関係」に関しては、加藤(2003)の3.2.2.3にも関連する議論がある。

係」においては、形式的には複合助詞やその他の表現によって表される「深層格」を想定すべきであり、その立場に立てば、「内容補充」の表現も「内の関係」とみなすことができるものも多く、特にロシア語では「内の関係」のほうが普通の場合すらあるのである。

このように、内容補充修飾の問題だけでも、日露間で必ずしも対応しない例が多いことが分かる。また、ロシア語を通すことによって、日本語の主名詞と連体節の間の関係に新たな可能性が見えてくることもある。以下、他の「外の関係」の考察を進めていこう。

2. 相対名詞修飾

相対名詞修飾とは、例えば「東京に引っ越してくる前に」や「私たちが座った後ろの席にあの男がいた」のように、主名詞が相対的な時間や空間を表す名詞である場合である¹¹。これらの名詞は、内容説明が当該の主名詞自身ではなく、その名詞と相対的な関係にある名詞に向けられる点が特徴的である。例えば次の2文を比べよう。

- (45) 私たちが座った後ろの席は日当たりがよく、眠くなった
 (46) 私たちが座った後ろの席にあの男がいた

(45)は連体節「私たちが座った」が「後ろの席」を直接修飾しており、「私たちが後ろの席に座った」という叙述文が想定可能な「内の関係」であるが、それに対して(46)は「私たちが座った席の後ろの席」という意味であり、連体節が直接的に主名詞を修飾するわけではない。つまり、「相対名詞修飾」とは、基準となる時点や場所、位置をもつことによって、ある特定の時点や場所、位置

¹¹ 「相対名詞修飾」の範囲は研究者によってかなり異なる。本稿次節の「付随名詞修飾」をここに含める立場もあれば、付随名詞修飾の一部をここに含める立場もあるが、本稿では「相対名詞修飾」をかなり狭く設定している。

を指し示し、その基準となる時間や空間を連体節が表すのである。

この時間と空間に関する連体修飾表現は、全体として連用修飾節となる 경우가多く、ロシア語でも慣用的に確立した表現となる場合が多いため、和文露訳という問題設定の中では、連用修飾表現の中で考えることにしよう。

【時間】

「…する前」、「…する後」およびそれに類似した表現は、ロシア語では全体として決まった表現となる場合が多い。

- (47) 東京に引っ越してくる前に：перед тем как я переехал в Токио
- (48) 戦争が始まる30年前に：за 30 лет до того как началась война
- (49) ウィルスに感染した3日後に：через 3 дня после того как я был инфицирован вирусом
- (50) 私が大学を出た翌年に：на следующий год после того как я окончил университет
- (51) 試験を受けたあとで：после того как я сдавал экзамен

【空間】

空間表現の場合も、全体として連用修飾節となる場合がほとんどだが、相対名詞修飾表現はロシア語では日本語ほど自由に表現され得ず、相対名詞(「場所」など)を適宜補いながら訳されるだろう¹²。

- (52) 大学が建っている横に(=大学が建っている場所の横)に：рядом с **местом, где** стоит университет
- (53) 彼が立っている向かいに(=彼が立っている場所の向かい)に：напротив

¹² 実際の翻訳の場面では、節で表現せずに、例えば(52)は「大学の横に」(рядом с университетом)、(53)は「植えられているさまざまな花の奥に」(за разными посаженными цветами)などと表現されることが多いかもしれない。

места, где он стоит

- 54 私が住んでいた隣の部屋(=私が住んでいた部屋の隣の部屋) : комната, соседняя с **той, где я жил**
- 55 さまざまな花が植えられている奥に(=さまざまな花が植えられている場所の奥に) : за **местом, где** посажены разные цветы

3. 付随名詞修飾

このタイプもまた連体節が主名詞の内容を直接説明するわけではないが、しかし主名詞と連体節の間に因果関係が認められるものである。寺村(1975-78)では「相対性」の中に含まれており、実際多くの場合、相対名詞修飾の拡張と考えるのが妥当であろう。しかし、和文露訳に際しては第2節の相対名詞修飾とはかなり性格が異なることなどから、本稿では別に扱うことにし、「付随名詞修飾」という名称を採用する¹³。主名詞(N)と連体節の間の関係は多岐にわたるが、いくつかの代表的なパターンに分類される¹⁴。

3.1 事態により生じる感情や認識、感覚、モノ、事柄

多くの場合、「…コトニヨルN」という言葉を補えるタイプであり、ロシア語ではまず〈原因〉を表すотによって表されることが多いだろう。

- 56 静かに好きな本に読みふけられる (コトニヨル) 喜び : радость **от того, что** могу спокойно погрузиться в чтение любимой книги¹⁵
- 57 仕事が見つからない (コトニヨル) いらだち : раздражение **от того, что** не находится работа
- 58 大仕事を無事に終えた (コトニヨル) 感慨 : восторг **от того, что я**

¹³ これは日本語記述文法研究会編(2008)で採用されている名称である。

¹⁴ 本節の分類に関しては、日本語記述文法研究会編(2008)や益岡(2009)などを参照。

¹⁵ この例文は日本語でも「トイウ修飾」が可能であり、内容補充修飾とも考えられるが、ロシア語でもрадость, что...という表現も可能である。

успешно совершил большую работу

(59) 十数時間歩き続けた(コトニヨル)疲労 : усталость **от того, что** я продолжал ходить десять с лишним часов

ほかに、特に「結果」の意味を含む語が主名詞の場合には、**того, что...**のように直接主名詞に生格でかかる例が多い(日本語でももし言葉を補うとすれば「コトニヨル」よりも「コトノ」であろう)。

(60) 我々が古文書を詳細に調査した(コトノ)結果 : результат **того, что** мы тщательно исследовали архивные документы

(61) タオルで何かを拭いた(コトノ)跡 : следы **того, что** полотенцем что-то вытирали

また、日本語とロシア語で一致しない注意すべき例もある。

(62) ドストエフスキーの小説を読んだ感想

日本語では「ドストエフスキーの小説を読んだ」という事態から「感想」が生じる、という論理構成になるが、しかしロシア語では、「ドストエフスキーの小説を読んだ」という事態そのものから感想が生じると捉えるのではなく、あくまで読む対象つまり「ドストエフスキーの小説」から「感想」が生じると捉えるため、

(63) впечатление от прочитанного романа Достоевского

とするか、あるいは複文ならば、「読んだ後の感想」と考え、

(64) впечатление **после того, как** я прочитал роман Достоевского

とすべきである。同様に、

- (65) 魚を焼く煙
- (66) 魚を焼く匂い
- (67) 水がしたたる音
- (68) 足を骨折した痛み

などは、それぞれロシア語では「焼かれる魚の煙／匂い」、「したたる水の音」、「骨折した足の痛み」などのように、対象そのものから現象が生じると捉える表現の方が普通であり、例えば次のようなロシア語となる¹⁶：

- (69) дым от жарящейся рыбы
- (70) запах жарящейся рыбы
- (71) звук капающей воды
- (72) боль в сломанной ноге

なお、主名詞「匂い」や「音」に関しては、実際には「…匂いがする」「…音がする」「…音が聞こえる」という文脈で使われることが多く、その場合ロシア語では、このように「N+節」の形式ではなく、пахнуть, как... (…匂いがする)、слышаться, как... (…音が聞こえる) などと表現されるだろう。

3.2 事態に応じて与えられるモノを表す名詞

これは「～コトニ対スルN」と解釈できるものであり、一つのパターンとして存在する。ロシア語ではいくつかの前置詞を伴うが、次のような例が代表的

¹⁶ 動作を表す動詞派生名詞を用いた дым от жарки рыбы / запах (от) жарки рыбы (запах при жарке рыбы) / звук от капания воды / боль от перелома ноги もそれぞれ可能ではある。また、例えば「鼻が詰まっていることによる頭痛」(головная боль от того, что заложен нос)のように、痛みの場所とその原因が別々のものであるときには、複文の構文はまったく自然である。

であろう。

- (73) いたづらをした (コトニ対スル) 罰 : наказание **за то, что** проказничал
(74) 手伝ってくださった (コトニ対スル) お礼 : благодарность **за то, что**
помогли нам

3.3 事態の実現や成立のための要件や手だてを表す名詞

これは「～タメノN」と解釈できるパターンであり、ロシア語では多くの場合、N для того, чтобы... が対応する。

- (75) 海外旅行に出かける (ノタメノ) 準備 : подготовка **для того, чтобы** отправиться в заграничное путешествие
(76) 売り上げを伸ばす (ノタメノ) 努力 : усилия **для того, чтобы** увеличить объем продаж
(77) 電車がバスに衝突しない (ノタメノ) 仕組み : механизм **для того, чтобы** поезд не сталкивался с автобусом¹⁷

3.4 事態の実現や成立を妨げるモノを表す名詞

これは「～コトニトッテノN」と解釈できるパターンであり、ロシア語では多くの場合、N для того, чтобы... が対応する。

- (78) 田中が首位をとる (コトニトッテノ) 邪魔 : помеха **для того, чтобы** Танака занял первое место
(79) 歩行者が通行する (コトニノッテノ) 妨げ : помеха **для того, чтобы** пешеходы проходили

¹⁷ これは「(この) 仕組みにより (おかげで) 電車がバスと衝突しない」という「内の関係」とも解釈可能であり、механизм, по которому (благодаря которому) поезд не сталкивается с автобусомなどと表現可能である。

3.5 事態が備えているものを主名詞とする場合

これは事態が備えているものを表す名詞が主名詞であり、連体節が主名詞の表すものが備わっている事態を述べる場合である。多くの場合「～コトノN」と解釈でき、ロシア語では、N того, что... が対応することが多い。

- ㉙) 多くの時間と金を割いた (コトノ) 意味 : значение **ТОГО, ЧТО** я уделил много времени и денег
- ㉚) ここでチケットを買う (コトノ) 利点 : преимущество **ТОГО, ЧТО** здесь покупаем билеты
- ㉛) 山本が犯人である (コトノ) 証拠 : улики **ТОГО, ЧТО** виновен Ямамото
- ㉜) 大地震が起こる (コトノ) 前兆 : признак **ТОГО, ЧТО** произойдет большое землетрясение

4. 「ヨウナ修飾表現」

前稿で連体修飾表現を「基本型修飾表現」、「トイウ修飾表現」、「トノ修飾表現」、「ヨウナ修飾表現」に分類し、これまではじめの3つに関して見てきた。さいごに、「ヨウナ修飾表現」に触れておこう。このタイプは「内の関係」、「外の関係」すべてに関わるものであり、主名詞について例示を示したり、あるいは特定の属性を取り出して表現したりするものである。ロシア語では、もっぱら такой という語が主名詞に伴ってこの意味を付与する¹⁸。

ここで特に取り上げるべきは、такой と相関的な что 節や чтобы 節を伴う構文であろう(такой N, что (чтобы)...)。これはロシア語では主名詞(N)の程度や属性を強調する構文であり、連体節と主名詞の間に格関係が成立しない「外の関係」をなす。

¹⁸ ここでは「ヨウナ修飾表現」に対応するものとしてこの такой を取り上げているが、これは実際には必ずしも「ヨウナ」と訳されるとは限らず、場合によっては「ホドノ」やその他の日本語に対応する。

- ㉘ 何も見えないような霧：**такой** туман, **что** ничего не видно
㉙ 手がかじかむような寒さ：**такой** холод, **что** руки коченеют
㉚ 私は何もはっきりしたことは言えないような状況にある：Я в **таком** положении, **что** не могу сказать ничего определенного.
㉛ 辞書なしで簡単に読めるような本が私には必要だ：Мне нужна **такая** книга, **чтобы** ее можно было легко читать без словаря.

しかし、ほぼ同様の文は関係代名詞を使った「内の関係」の構文でも表すことができる。例えば、㉘は「霧の中で何も見えない」や「霧のせいで何も見えない」という叙述文が想定可能であり、ロシア語で

- ㉜ такой туман, **в котором** ничего не видно
㉝ такой туман, **из-за которого** ничего не видно

などと表現することも可能であろう。

この㉘、㉜、㉝の3つの文を比べた場合、㉘では主名詞と連体節の間に格関係はなく、単に主名詞がどのようなものであるかという特徴を述べているにすぎないが、㉜や㉝（特に㉝）では主名詞と連体節間の関係が明示されており、㉘よりも意味が明確化されている。このように、ロシア語の**такой N, что (чтобы)...**の構文は、主名詞(N)と**что (чтобы)**節の間に格関係がなく、単に内容を説明しているだけという点で、日本語の連体節と極めて近い性質を持っていることがわかる。これは、「ヨウナ修飾表現」だけに関わらず、連体修飾表現全般に関わる問題でもあり、今後さらなる問題の整理が必要であろう。

さいごに

前稿と本稿で、日本語の連体修飾表現のロシア語訳の問題を扱ってきた。連体修飾表現に関する日本語の大きな特徴は、主名詞と連体節が並置されるだけで両者の間の関係が形式上まったく明示されないということである。それに対して、ロシア語では主名詞と修飾節が並置されるだけということは、疑問詞節などの場合を除いて、基本的にあり得なく、必ず何らかの関係性が格や接続詞などによって明示される。従って和文露訳においては、日本語の主名詞と連体節間の関係をまずしっかり捉えるということが絶対的に必要となる。

その前提のもとに、寺村(1975-78)以来進んできた日本語学における連体節研究の知見を援用しながら、主名詞と連体節の関係を「内の関係」、「外の関係」に分類し、さらに「外の関係」については「内容補充修飾」、「相対名詞修飾」、「付随名詞修飾」に下位区分し、個々に例を挙げながら、ロシア語訳の可能性を探った。

考察の過程で、日本語とロシア語で主名詞と連体節の関係の分類が一致しない例があったり、同一の例文が様々に解釈可能であるという例も多く見られたが、それは当然のことである。日本語で主名詞と連体節間の関係が明示されないということは、そもそも本質的に関係性が未分化であいまいなものであり、単に多くの場合、何らかの関係が想定できる、というにすぎないからである。前稿でも述べたとおり、近年の日本語学では「内の関係」や「外の関係」の分類から離れて、語用論的な分析の方に重点が置かれることが多いが、このような理由でそれもある意味自然な流れであろう。しかし「和文露訳」ないし「日露対照言語学」という本稿の枠組みにおいては、従来の研究の方向性は決して無駄ではなく、むしろ露訳にあたって有効な視点を提供してくれることはこれまで見てきたとおりである。

和文露訳にあたっては、主名詞と連体節の関係が何かを確定すること自体は本質的なことではなく、まずは様々な可能性を考え、さらにロシア語における

個々の名詞や動詞の語法と照らし合わせながら、どのような表現が可能であるかを確定する作業が必要であろう。

本稿で扱えたのは基本的なタイプのものであり、しかもそれぞれについて網羅的に単語や表現を挙げられたわけではない。また、本稿では一部の例外を除き「主名詞+連体節」の部分だけを取り上げ、ロシア語でも同様の形態のみを取り上げたが、実際には日本語の「主名詞+連体節」がさらに大きな文脈の中でまったく別の構造を持つロシア語に対応することもよくあることである。このように論じ残している点も多いが、ロシア語学習者にとって困難である連体修飾表現の露訳の可能性を考えるための一つの視点は少なくともも示しているはずである。今後、前稿で扱った日露対照言語学における「深層格」の問題も含めて、さらなる研究の進展が望まれる。

【参考文献】

- 加藤重広(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 高橋健一郎(2009)「和文露訳の問題点(2)―連体修飾表現の翻訳法についての試論(その1)―」／札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』第71号、165-189頁
- 寺村秀夫(1975)「連体修飾のシンタクスと意味―その1―」／大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』4号、71-119頁
- 寺村秀夫(1977a)「連体修飾のシンタクスと意味―その2―」／大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』5号、29-78頁
- 寺村秀夫(1977b)「連体修飾のシンタクスと意味―その3―」／大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』6号、1-35頁
- 寺村秀夫(1978)「連体修飾のシンタクスと意味―その4―」／大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』7号、1-24頁
- 日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 益岡隆史(1997)『複文』(新日本語文法選書2)くろしお出版

益岡隆史(2002)「複文各論」／野田尚史・益岡隆史・佐久間まゆみ・田窪行則

『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店、63-116頁

益岡隆史(2003)『三上文法から寺村文法へー日本語記述文法の世界』くろしお
出版

益岡隆史(2009)「連体節表現の構文と意味」／『言語』Vol. 38- 1、2009- 1、
18-25頁